

〔資料〕

看護学における質的事例研究法に関する論考 — クロニックイルネスとしての糖尿病に関する質的事例研究に焦点をあてて —

黒江 ゆり子 藤澤 まこと

The Properties and Significance of Qualitative Case Study Research of Nursing: Focusing on QCSR of Diabetes Care in Chronic Illness

Yuriko Kuroe and Makoto Fujisawa

I. はじめに

事例研究法 (case study research) は、1990年代後半に RK.Yin と RE.Stake が質的研究の一つとしての事例研究法の考え方と方法を提示し、多様な領域で新たな局面を迎え発展をみた。看護学においても同様に、Yin あるいは Stake の考え方を基盤とした事例研究の報告がみられるようになり、2000年代には質的事例研究 / 質的事例研究法 (qualitative case study research)、あるいは記述的事例研究 / 記述的事例研究法 (descriptive case study research) による報告がされるようになった (黒江, 2013)。

事例研究法における事例 (case) とは、Yin (1994) によれば、「個人、事象 (意思決定、プログラム、実施過程、組織変化等)、及び小集団」であり、Stake (2000) によれば「固有性をもつもの。単一体であるが、同時にさまざまな要素の結合体」である。また、2001年に心理臨床学の見地から事例研究法に関する書籍を出版した山本ら (2001) によれば、「臨床研究は、常に具体的事象から出発する。その個々の事象を『事例』として俎上にあげ、詳細な検討を重ねる」とされ、個々の事象として説明されている。そのため、事例研究法は、個人を事例としたもの、小集団を事例としたもの、組織を事例としたもの、および事象を事例としたものなど多様な様相を呈している。

2009年に看護学における質的事例研究について文献レビューを報告した Anthony (2009) は、質的事例研究は現象の特性の側面を明らかにするための優れた方法論であると指摘すると同時に、質的事例研究法の名称、特性、方法については明確にされておらず、混乱があることを示して

いる。そこで、今回は、クロニックイルネス (慢性の病い) に関する看護における 2000年以降の質的事例研究の特性について、慢性疾患の代表的な一つである糖尿病ケアにおける質的事例研究の中で、何が事例 (case) として焦点化され、事例のどのような現象に迫り、その現象がどのように描き出されているか等の観点から考えてみたいと思う。

II. 質的事例研究法における二つの姿勢と分類

質的事例研究法には、「事例そのものに包摂される特性に目を向ける姿勢」と「事例から導かれる特定の事柄に目を向ける姿勢」の二つの方向性がみられる (黒江, 2016)。前者は、事例の全体像の本質に迫る事例研究であり、あくまでも事例について深く理解し、そこから洞察を深化させるものである。後者は、事例の特定の側面に焦点を合わせる事例研究であり、理論構築に繋げようとするものである。また、事例研究は、単一事例での事例研究と複数事例での事例研究、および累積的事例研究等があり、研究課題によって研究方法を選択することが可能となっている。

「事例そのものに包摂される特性に目を向ける姿勢」は、表1に示すように Yin による説明的事例研究と記述的事例研究、Stake による本質的 / 個性探究的事例研究、山本らによる事例の全体像の本質に迫る事例研究に繋がる特性であり、「事例から導かれる特定の事柄に目を向ける姿勢」は、Yin による探索的事例研究、Stake による手段的事例研究と集合的事例研究、および山本らによる事例の特性の側面に焦点を合わせる事例研究に繋がる特性である。

表1 事例研究法における二つの姿勢

二つの姿勢	概要	著者
事例そのものに包摂される特性に目を向ける姿勢	説明的(explanatory)事例研究と記述的(descriptive)事例研究	Yin, 1994
	本質的 / 個性探究的(intrinsic)事例研究	Stake, 2000
	事例の全体像の本質に迫る事例研究	山本ら, 2001
事例から導かれる特定の事柄に目を向ける姿勢	探索的(explorative)事例研究	Yin, 1994
	手段的(instrument)事例研究と集合的(collective)事例研究	Stake, 2000
	事例の特性の側面に焦点を合わせる事例研究	山本ら, 2001

註：黒江（2016）：慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考より一部引用・加筆。各研究法の特徴は当該文献を参照のこと。

Ⅲ. クロニックイルネスとしての糖尿病における質的事例研究法

1. 糖尿病ケアにおける質的事例研究法の推移

クロニックイルネス（慢性の病い）と糖尿病の看護における質的事例研究法についてCINAHLを用いて、2000-2004年、2005-2009年及び2010-2015年の報告状況を、表2に示す検索語を掛け合わせて調べてみた。表2に示すように、クロニックイルネスに関しては（検索語：Qualitative case study + nursing + chronic illness）、2000-2004年22件、2005-2009年32件、2010-2015年71件であった。また、糖尿病に関しては（検索語：Qualitative case study + nursing + diabetes mellitus）、2000-2004年1件、2005-2009年7件、2010-2015年15件であり、どちらも年次的に増加傾向にあることがわかる。

2. 糖尿病における質的事例研究の実際

糖尿病における看護に関する質的事例研究について、最近の質的事例研究がどのような目的・方法で行われ、何が事例であり、どのような知見が得られているかを確認する

ため、2010-2015年の15件の報告の中から、文献レビュー、ポルトガル語による文献、および研究方法として質的事例研究であることが明記されていない報告を除いた6文献について概要を示すと表3のようである。事例(case)が、個人・家族であるもの、組織が事例であるもの、および特定の事象が事例であるものがみられた。糖尿病においては、第一義的に個人・家族による日々の生活の中での対応が重要となることから、この中から個人・家族を事例(case)と捉えた質的事例研究についてもう少し詳細を紹介する。

1) 1型糖尿病をもつ子どもと家族のソーシャルサポートに関する研究

Oliveiraら（2010）は、1型糖尿病をもつ子どもの家族のソーシャルサポートとネットワークについて明らかにすることを目的とした質的事例研究法による研究を報告している。4家族に協力を依頼し、複数回のインタビューを行い、そのインタビュー内容から家族のソーシャルサポートと社会的ネットワークの状態を導いている。4家族のうち、2家族は貧困層であり、2家族は中階級層の家族であった。

表2 クロニックイルネスと糖尿病に関する質的事例研究法

(単位：件)

検索語		年	2000～2004	2005～2009	2010～2015
クロニックイルネスと質的事例研究法	Qualitative case study + nursing + chronic illness		22	32	71
	Qualitative case study + nursing + chronic illness + psychosocial		22	32	36
	Qualitative case study + nursing + chronic illness + single case		6	8	10
	Qualitative case study + nursing + chronic illness + multiple case		3	5	15
糖尿病と質的事例研究法	Qualitative case study + nursing + diabetes mellitus		1	7	15
	Qualitative case study + nursing + diabetes mellitus + psychosocial		1	3	6
	Qualitative case study + nursing + diabetes mellitus + single case		0	1	0
	Qualitative case study + nursing + diabetes mellitus + multiple case		0	0	1

表3 糖尿病ケアにおける事例研究の概要

著者(報告年) 研究目的	事例/case	方法	結果	考察
1. Goldberg他(2013) 目的: 米国におけるプライマリケア実践は いかにすれば患者中心 のケアを実現できるか を深く理解する。	組織: バージニア でプライマリケア を実践している3 施設。(ケースA: トップライセンスモ デル施設、B: ケ ア調整モデル施 設、C: 伝統的モ デル施設)	3 ケースの特徴を 記述。インタビュー、 電話による質問紙 調査、ケアプロセ スの観察、記録。	チーム基盤のプライマリケアの特徴として3 ケ ースが示されている。ケースA [トップライセンスモ デル] 高いライセンス有する専門職者によるケア を実践。ケースB [ケア調整モデル] 患者のケア の管理にチームで焦点をあて実践。ケースC [高 い機能を果たすチームによる伝統的モデル] 医 師が中心となってケアを実践。	チーム基盤のケアはプ ライマリケアにおいて 重要である。チーム基 盤のケアモデルは、複 雑で高リスクの患者の ニーズに対応すること が可能になり、患者・ ケア提供者・雇用の 満足度が高まる。
2. Mazaheri他(2012) 目的: PWSの診断 を受けた子どものケ アが母親と同胞に与 える影響	家 族: Prader - willi syndromeの 家族メンバーをもつ 12 家族。複数事 例。	質的事例研究法 (インタビュー, Yin に基づく)を含む Mix method。	家族は、多くの葛藤、孤立、怒り、不安の感情 を抱いている。PWSにおけるケアは家族システム に大きな影響を与える。	母親と同胞は心理社会 的な支援を必要として いる。
3. Lorentzen 他 (2011) 目的: 過体重児と家 族の食生活の変化に 関する体験を描く。	個人・家族: 過体 重児(4人)とそ の家族(親6人、 同胞4人)。	記述的質的事例研 究法。複数回のイ ンタビュー。現象 学的アプローチに よる分析。	食養生プロジェクトを実施。事例1は最初の2年 間は体重は維持したが、3年目に増加、事例2 は最初の2年で12kg増加、3年目で13kg減少。 事例3は、1年目で10kg減少。事例4は3年 目で4kg減少。子どもの反応として、食生活の変 化と自発性。親の反応として、個人的サポート、 甘やかしと保護、限度の設定、変化への妨害。 親は子どもの力に対応しようとしているが、専門職 等の間に壁を感じていた。	過体重児と親は、罪悪 感等を感じている。専 門職者はこのような児 に対するスティグマに 対応する必要がある。罪 悪感のナラティブによ って、人々は過体重と ともに生きることの状 況を知ることができる。
4. Adaji 他(2011) 目的: 糖尿病ケア プランニングにおけ るテクノロジー的障 壁を明らかにする。	事象: 糖尿病ケア プランニングにお けるテクノロジー的 障壁。	質的事例研究法。 インタビュー: 21 人のステークホル ダー: 研究機関、 ソフトウェア企業、 プライマリケアの 人々。	テクノロジー的障壁は、基本的なIT活用、標準 化と相互運用性の不足、及びシステム内のバグに 起因する。	システム標準の決定及 び相互運用性のために 利害関係者の役割につ いて調べる研究が今後 必要である。
5. McDonald(2011) 目的: 糖尿病ケアに 関わる私的・公的 地域健康サービスの 協働に関する機関的 要因の影響を明らか にする。	事象: 20の施設 (45人が協力)。	半構成的インタ ビューと内容分析 を含む大規模な質 的事例研究法。	協働のパターンは、利益、協働の経費、サポ ート体制によって異なる。利益は機関の目標に依 拠する。経費は、機関の規模、構造、複雑性およ び文化で異なる。連携は私的・私的機関間の方 が私的・公的機関間より容易であった。	協働的地域健康サー ビスを提供するためには 、資金提供が必要であ る。さらに、協働のた め柔軟な準備が必要で ある。
6. Oliveira(2010) 目的: 1型糖尿病 の子どもをもつ家 族(4家族)。複数 事例	家族: 1型糖尿病 をもつ子どもの家 族(4家族)。複数 事例	質的事例研究法。 インタビュー、ジェ ノグラムとエコマ ップの作成。	A家族: 市街地に住む7人家族。児は賢く話が 豊か。健康保険に未加入。B家族: 3人家族。 児はおとなしく知的で責任感がある。自らSMBG (自己血糖測定)を実施し、母親に報告する。C 家族: 中階級層の3人家族。児はてんかんを持 っているが朗らか。健康保険に入っている。D家 族: 貧困地域に住む4人家族。児はやんちゃで神 経質。学校で低血糖になったことがある。健康保 険未加入 ソーシャルサポートは情動的、情動的、道具的、 価値判断的サポートがみられた。社会的ネット ワークは、学校、支援施設等と繋がっている。	事例研究は、患者の家 族が新しい状況に対応 する時のニーズを明確 にすることができる。ま た、糖尿病児のケアに おいては、家族メンバ ー間の良好な人間関係 が重要である。看護職 は、児のみならず家族 全体をサポートし、注 目し、方向づけること が必要である。

この報告の中で筆者らは、ソーシャルサポートは、情動的 emotional、情動的 informative、道具的 instrumental、価値判断的 appraisal サポートがみられたことを示している。情動的サポートでは、子どもの母親が子どものケアに対して祖母からのあたたかい支えを受けており、情動的サポートでは、医師や栄養士から多くの知識を得ていた。道具的サポートでは、祖父母から子どもの好きな果物やクッキーの差し入れがあり、価値判断的サポートでは、母親が神に感謝し、子どもと共に在ることの意味を次のように語っている状況を報告している。「私は本当に幸せです。私は多くの重荷を背

負いました。でも、それを乗り越えてきました。・・・重要なことは、彼女が私と一緒にいることです。彼女は生きています。そして彼女は健やかです。」

また、社会的ネットワークは、それぞれの家族が、学校(先生や校長先生等)、施設(薬局の人等)と繋がっていることが示されている。そして、これらの社会的ネットワークは、糖尿病の子どもを家族を力づけていた。筆者らは、家族メンバーの良好な人間関係が、糖尿病の子どもケアにおいて最も重要であることから、看護職は子どものみならず、家族全体に注目し、支え、方向づける必要があると指摘して

いる。この事例研究から人々は、この研究の基盤には1型の子どもをもつ家族全体の健康を増進したいという専門職者の思いがあることを感じる。

2) 過体重の子どもと家族の食の変化に関する体験についての研究

Lorentzenら(2011)は、過体重の子どもの家族がどのような食生活の変化を体験しているかを明らかにすることを目的とした質的事例研究による研究を報告している。過体重の子ども4人とその家族10人(親6人、同胞4人)に食養生プロジェクトを実施し、複数回のインタビューを行い、現象学的アプローチによる分析を行っている。事例1は、最初の2年間は身長が高くなっても体重を維持することができたが、3年目に体重の増加をみた。事例2は、最初の2年で12kg増加したが、3年目で13kg減少した。事例3は、1年目で10kg減少し、事例4は、3年目で4kg減少している。

この報告の中で筆者らは、個別的モチベーションと自発性を持っている子どもは、体重減少に関して積極的であり、そのような積極性は情動的に両親によって支えられていることを示している。その一方で傷つきやすさを持っている子どもは、自分の糖尿病と向き合うことができずに、悲しみを感じ、自己尊重が低く、孤立しており、食のコントロールも難しい状況であった。

また、親の反応としては、個別的サポートの提供、甘やかしと保護、制限の設定、および変化への妨害がみられることが示されている。体重減少へのモチベーションの高い子どもの親は、子どもを個別に受けとめてサポートを提供していた。体重管理が難しい子どもの親は、子どもに制限を設けることができず、親は子どものもつ力に対応しようとしながらも、専門職等との間に壁を感じていた。

筆者らは次のように指摘する。過体重の子どもと親は、社会のスティグマを経験し、なんらかの罪悪感を感じていることがある。専門職者は、このような過体重の子どもへのスティグマに対応する必要がある。そして、私たちはナラティブによって、人が過体重とともに生きるものの状況を知ることができる。

3) Prader Willi syndrome (プラダ・ウイリー症候群:PWS)の診断を受けた子どものケアが母親と同胞に与える影響についての研究

Mazaheriら(2012)は、PWSの診断を受けた子どものケ

アが母親と同胞に与える影響を明らかにすることを目的とし、Yinにもとづく質的事例研究法を用いた研究を報告している。PWSをもつ12家族にインタビューを行い(母親12人、同胞13人)、インタビュー内容の分析を含むMix methodにて研究をすすめている。

この報告の中で筆者らは、PWSの診断を受けた子どもの家族(母親と同胞)は、多くの葛藤、孤立、怒り、不安の感情を抱いていることを示している。たとえば、ある母親の次のような語りが紹介されている。「私はとてもストレスを感じています。この子を育てるのは大変で、時には鬱状態になり、時には泣き続けました。いつも食べ物から子どもを遠ざけなくてはならなくて。そのようなことを誰も理解してくれる人がいなくて、私に社会的生活はありませんでした。パーティに行くこともできず、公的な場に出かけることもできません。私は人生とは大変なことばかりで、楽しいことは一つもないと思うことが多く、抗鬱剤を飲み、カウンセリングを受けています。」

筆者らは、PWSにおけるケアは、家族システムに大きな影響を与え、家族(母親と同胞)は心理社会的な支援を必要としていることを示唆している。

IV. 質的事例研究の特性とあり方について

質的事例研究を教育の領域で続けてきたMerriamは、書籍の中で、質的事例研究は、特定主義的 particularistic、記述的 descriptive、発見的 heuristic なものとして特徴づけられるとしている(Merriam,1998)。特定主義的とは、事例研究がある特定の状況や出来事やプログラムや現象に焦点を当てることを意味する。記述的とは、事例研究の最終産物が研究している現象の豊かで、「厚い記述」であることを意味する。発見的とは、事例研究が研究対象の現象への読者の理解を促すものであることを意味する。新しい意味を発見させ、読者の経験を拓げ、すでにわかっていることを確認させてくれると説明されている。

先に紹介した糖尿病における3つの質的事例研究のそれぞれについて、Merriam(1998)による質的事例研究の特性を踏まえて確認してみると表4のようになり、これらの3つの事例研究は、特定の状況に焦点を当て、インタビュー内容を基盤に現象を豊かに記述し、現象に関して新たに見出された情動や状況を示すことで、病いと生きる人々の日々の生活の営みについての読者の理解を促す等、質的事例研究としての特性を十分に包摂していると考えられる。ま

表4 糖尿病における質的事例研究と Merriam による特性

報告者 (報告年)	Merriam による質的事例研究の特性
Oliveira ら (2010)	<p>特定主義的: 1型糖尿病の子どもと家族に焦点を当てている。</p> <p>記述的: 1型糖尿病の子どもをもつ4家族にインタビューを行い、7人(母親4人、父親2人、祖母1人)にインタビューを実施し、そのインタビュー内容からそれぞれの家族の状況、及びソーシャルサポートと社会的ネットワークに関する現象を厚く記述している。</p> <p>発見的: 1型糖尿病の家族は情動的・情報提供的、道具的、価値判断的サポートと社会的ネットワークで支えられており、このようなサポートにより、家族メンバー間の良好な人間関係が子どものケアにとって重要であることを、それぞれの家族の状況と語りから読み取ることができる。</p>
Lorentzen ら (2011)	<p>特定主義的: 過体重の子どもと家族(親・同胞)に焦点を当てている。</p> <p>記述的: 過体重の子ども4人と家族10人(親6人、同胞4人)に食養生プロジェクトと、複数回のインタビューを実施し、そのインタビュー内容から、減量に向けた子どもと親の反応に関する現象を厚く記述している。</p> <p>発見的: 子どもの反応としては、個別のモチベーションと自発性を持っている子どもは、体重管理に関して積極的であり、傷つき易さを持っている子どもは、病気に向き合うことができず、悲しみを感じ、孤立していて食のコントロールが難しい状況であった。親の反応としては、子どもの個性をとらえた個別サポートの提供、甘やかしと保護、制限の設定、変化への妨害などが十分に説明されている。</p>
Mazaheri ら (2012)	<p>特定主義的: PWSの子どもの母親と同胞に焦点を当てている。</p> <p>記述的: PWSの子どもをもつ12人の家族にインタビューを行い(母親12人、同胞13人)、そのインタビュー内容から、PWSの子どものケアが家族の日常生活や感情に与える現象について、母親と同胞の語りにもとづき厚く記述している。</p> <p>発見的: PWSの診断を受けた子どもの家族(母親と同胞)は、多くの葛藤、孤立、怒り、不安の感情を抱いており、PWSにおけるケアは、家族システムに大きな影響を与えていることを踏まえ、子どもの家族(母親と同胞)は、心理社会的な支援を必要としていることが十分に説明されている。</p>

た、これらの著者は、ある現象に特徴的な重要な要因間の相互作用をも示そうとしている。

すなわち、質的事例研究は、事例(case)が、ある特定の状況や出来事やプログラム等として明確に示されることによって、描くべき現象が焦点化され、インタビュー法などを含む豊かなデータから、それらの現象に関して厚く記述されるという特性を有する。そのように記述されることによって、人々は、描かれている現象について深く理解し、新しい意味を発見し、自らの経験を拓けることができるのであり、そのような可能性をもったものなのであると言える。

V. 考察

1. 質的事例研究の二つの姿勢と看護学について

今回紹介したところの個人・家族に焦点をもつ3つの質的事例研究について、先に述べた事例研究の二つの姿勢からみてみると、いずれも、事例の本質に迫ろうとする側面と事例の特性からモデルや理論構築につなげようとする側面を併せもち、二つの姿勢が共存していた。Merriam(1998)が指摘するように、事例(case)の一つひとつに関して厚い記述がされていることから、読み手は特定の現象についての深い理解が可能となり、新しい発見に至ることができる質の高い報告であった。それは、特定された現象において、看護がどのようにあればいいかの示唆が得られるものでもあり、また、看護における有用性が示されているものでもある。

しかしながら、これらの質的事例研究に看護実践の生き生きとした状況が記述されているかという点、そうでもない。

質の高い看護実践を導くためには、現実の看護実践が十分に描かれる必要がある。今後は、おそらく、これらの質的事例研究法にて得られた知見を看護ケアに反映させ、そのケアによってどのような現象が生じたのかを記述し、実際の看護ケアの知見をさらに累積する必要が生まれるであろう。看護実践におけるケアの実際を描き、そのケアの中で生じた事象に迫り、そこから深く洞察し、看護のあり方を導くような質的事例研究が求められていると考える。それは、単に現実で実施されたケアを説明するのみならず、実際のケアの場で生じたことを、一つの看護現象として明確にとらえ、その現象を深く洞察し、そこから将来の看護ケアへの示唆となる方向性を見出すことでもある。

そのような事例研究が看護学の中で多く行われるようになれば、Merriam(1998)が指摘するような質的事例研究として、特定主義的 particularistic、記述的 descriptive、発見的 heuristic な特性が遺憾なく発揮され、現在の看護の実践知が失われることなく、次世代に繋がっていくであろう。すなわち、特定の看護現象に焦点があることが明らかにされ、その看護現象について十分に記述され、その看護現象に関する読み手の理解を促す特性を有した事例研究になり得ると考えることができ、読み手はその事例研究から、自らの経験が喚起され、多様な要素で事例と自らの経験が繋がりが拓がり、どのような看護ケアが求められているのか問い続けることが可能になる。

2. 看護学における質的事例研究の定義について

事例研究について、Yin(1994)は、「事例研究は経験

的探究の独特の形態である」と説明し、Stake (2000) は、「事例研究とは、事例についての探究のプロセスでもあれば、その探究の産物でもある」とし、また、山本ら (2001) は、「臨床の事例研究とは、臨床現場という文脈で生起する具体的事象を、何らかの範疇との関連において、構造化された視点から記述し、全体的に、あるいは焦点化して検討を行い、何らかの新しいアイデアを抽出するアプローチである」と示している。

これらを基盤とするとともに、さらに Merriam (1998) による事例研究の特性と合わせて考えると、看護学における質的事例研究は、「看護現場という文脈で生起する具体的事象に包摂されている特定の看護現象に焦点をおき、看護現象として何が生起しているか、なぜ生起しているか、どのように生起しているか等について厚く記述し、そこから看護のあり方について洞察を深め、それらを示すことで焦点化された看護現象についての新しい知見を示すものである。また、それにより、看護現象に関する人々の理解の深化、新たな意味の発見、自らの体験の拡大を促進するものである。」と説明することが可能になると考える。

また、看護学の質的事例研究における事例 (case) は、個人・家族、集団、組織、および事象などの多様性をもつと考えられる。

おわりに

看護学における質的事例研究法について、クロニクイルネスの代表的の一つである糖尿病を中心に検討を行った。看護学における質的事例研究法の意義とその方法については、今後も検討を続けたいと思う。

謝辞

本研究は平成 26-28 年度科学研究費助成事業「基盤研究 (B)」「慢性看護実践における事例研究法の再構築」(研究代表者：内田雅子) の助成により推進した研究の一部の報告である。皆様に心より感謝申し上げます。

文献

Adaji, A., Schattner, P., Piterman, L. (2011). Web based diabetes care planning – sociotechnical barriers to implementation in general practice. *Australian Family Physician*, 40(11), 915-918.

Anthony, S., Jack, S. (2009). Qualitative case study methodology in

nursing research: an integrative review. *Journal of Advanced Nursing*, 65(6), 1171-1181.

Goldberg, D. G., Beeson, T., Kuzel, A. J., et al. (2013). Team-based care: a critical element of primary care practice transformation. *Population Health Management*, 16(3), 150-156.

黒江ゆり子. (2013). 時間的経緯を踏まえた看護学における事例研究法の意味に関する論考. *看護研究*, 46(2), 126-134.

黒江ゆり子, 藤澤まこと. (2016). 慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考. *岐阜県立看護大学紀要*, 16(1), 105-111.

Lorentzen, V., Dyeremose, V., & Larsen, B. H. (2011). Severely overweight children and dietary changes—a family perspective. *Journal of Advanced Nursing*, 68(4), 878-87.

Mazaheri, M. M., Rae-Seebach, R. D., Preston, H. E., et al. (2013). The impact of Prader-Willi syndrome on the family's quality of life and caregiving, and the unaffected siblings' psychosocial adjustment. *Journal of Intellectual Disability Research*, 57(9), 861-873.

McDonald, J., Powell Davies, G., Jayasuriya, R., et al. (2011). Collaboration across private and public sector primary health care services: benefits, costs and policy implications. *Journal of Interprofessional Care*, 25(4), 258-264.

Merriam, S.B. (1998/2004). 堀薫夫, 久保真人, 成島美弥 (訳), 質的調査法入門: 教育における調査法とケーススタディ (pp.37-48). ミネルヴァ書房.

Oliveira, I. R., Nascif-Júnior, I. A., Rocha, S. M. M. (2010). Promoting health in families of children with type 1 diabetes mellitus. *International Journal of Nursing Practice*, 16(2), 106-111.

Stake, R.E. (2000/2006). 事例研究, in N.K. デンジン, Y.S. リンカン著, 平山満善 (監訳), 藤原顕 (編訳), 質的研究ハンドブック 2 巻 - 質的研究の設計と戦略 -(pp.101-120). 北大路書房.

山本力, 鶴田和美編著. (2001). 心理臨床家のための事例研究の進め方 (pp.14-29). 北大路書房.

Yin, R.K. (1994/2011). 近藤公彦 (訳), ケース・スタディの方法 (第 2 版) (pp.26-72). 千倉書房.

(受稿日 平成 28 年 8 月 29 日)

(採用日 平成 29 年 1 月 11 日)